

令和 4 年 4 月 27 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00637

研究課題名(和文) 日英語におけるデフォルト志向性と構文の機能

研究課題名(英文) Default Preferences and the Functions of Constructions in Japanese and English

研究代表者

廣瀬 幸生 (HIROSE, Yukio)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：00181214

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、言語が示す一般的な文法・語用論的傾向を「デフォルト志向性」と呼ぶことで、日英語におけるデフォルト志向性と構文機能の関係について考察し、次の3点を示した。(1)日英語のデフォルト志向性は、代表者(廣瀬)が提唱する「言語使用の三層モデル」によって捉えられ、日本語は思考・意識の主体としての私的自己が中心の言語、英語は伝達・報告の主体としての公的自己が中心の言語と特徴づけられる。(2)日英語の構文には、各言語のデフォルト志向性を継承するものと、それを解除するものがある。(3)デフォルト志向性を解除する構文は、三層モデルが規定する日英語の無標の三層関係を変更させる特徴をもつ。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は次の3点である。(1)日英語のデフォルト的差異は、三層モデルにおける三層の組み合わせが異なることから生じるとする点が既存の理論にない独自の発想である。(2)日英語の構文には各言語のデフォルト志向性を継承することで存在意義が与えられるものと、それを解除することで存在意義が与えられるものがあり、どちらも三層のあり方との関係で特徴づけられるという考え方は、対照研究にこれまででない理論的基盤と多面的なアプローチをもたらす。(3)三層モデルに基づく本研究は、構文の対照研究だけでなく、日英語言語文化論や外国語としての英語教育・日本語教育にも寄与することが期待される。

研究成果の概要(英文)：By referring to general grammatico-pragmatic tendencies of languages as their “default preferences,” this study investigated the relations between default preferences and the functions of constructions in Japanese and English, and showed the following three points. (1) Default preferences in Japanese and English can be captured in terms of the “three-tier model of language use,” proposed by the principal investigator (Hirose), where Japanese is characterized as a private-self-centered language, and English as a public-self-centered language. (2) Japanese and English have not only constructions that inherit their default preferences but also those that override them. (3) The constructions overriding default preferences have properties that alter the unmarked three-tier relationships in Japanese and English as defined by the three-tier model.

研究分野：人文学・言語学・英語学

キーワード：デフォルト志向性 三層モデル 構文 機能 対照言語学 私的自己中心言語 公的自己中心言語

1. 研究開始当初の背景

(1) 代表者は、これまで、文法と語用論の関係にかかわる日英語の違いを記述・説明するための一般的枠組みとして、一連の研究で「言語使用の三層モデル」(以下、三層モデル)という考え方を提案してきた。三層モデルでは、まず、状況を捉え、それを言語化する話し手を、伝達・報告の主体としての「公的自己」と、思考・意識の主体としての「私的自己」という2つの側面に解体する。英語は公的自己中心の言語、日本語は私的自己中心の言語と特徴づけられる。次に、言語使用は、「状況把握」(私的自己による思いの形成)、「状況報告」(公的自己による思いの伝達)、「対人関係」(公的自己による聞き手への配慮)という三つの層からなり、言語のもつ「自己中心性」(無標の直示的中心)が公的自己にあるか、私的自己にあるかによって、3つの層の組み合わせが異なる。

(2) 三層モデルにとって重要なのが次の仮説である。英語は公的自己中心の言語で、通常、状況把握と状況報告が一体化し、それに対人関係の層が付加される。それに対し、日本語は私的自己中心の言語で、通常、状況把握が状況報告および対人関係から独立し、一方、状況報告は対人関係と一体化している。状況把握が状況報告と一体化する英語では、聞き手への伝達を意図する「公的表現」が無標の表現形態であるのに対し、状況把握が状況報告から独立する日本語では、聞き手を想定しないで話し手の思いだけを言語化した「私的表現」が無標の表現形態となる。

(3) 以上が三層モデルの基本的概要であり、日英語が通常示すデフォルトの特徴を捉えるものである。つまり、特別な理由がなければ、日英語の言語現象はこのデフォルト状態を志向すると言える。ところが、Konno (2015)が示したように、有標的な構文によってはデフォルト志向性が解除されるのである。例えば、Mad Magazine 構文と呼ばれる *Him wear a tuxedo?!* のような表現は話し手の驚きの反応を表す私的表現となる。また、Shizawa (2015)によれば、*Into the room came John.* のような場所句倒置構文は話し手の直接知覚を表す私的表現と解釈される。そうすると、次の問いが生じる。日英語が通常示すデフォルト志向性との関係で、様々な構文の機能はどのように特徴づけられ、それは理論的にどのように捉えられるのか。

2. 研究の目的

上記の研究背景から、本研究は三層モデルを基盤にして、日英語におけるデフォルト志向性と様々な構文の機能の関係について体系的に考察することを目的とし、次の3つの仮説を中心に研究を進める。(1)日英語のデフォルト志向性は三層モデルによって捉えられ、日本語は私的自己中心言語、英語は公的自己中心言語と特徴づけられる。(2)日英語の構文には、各言語のデフォルト志向性を継承するものと、それを解除するものがある。(3)デフォルト志向性を解除する構文は、三層モデルが規定する日英語の無標の関係を変更させる特徴をもつ。

3. 研究の方法

(1) 上記の目的に関わる仮説(1)については、三層モデルが文法と語用論に関する日英語の一般的差異を捉えるのに適した枠組みであることはこれまでの研究からかなり明らかになってきているため、本研究では、仮説(1)の更なる検証も兼ねながら、その方向性を推し進めることによって、デフォルト志向性を継承する構文と解除する構文が三層の関係によってそれぞれ次のような特徴をもつことを検討する。

- <継承の場合> 状況把握と状況報告の一体化(英語)・分離(日本語)
状況報告と対人関係の分離(英語)・一体化(日本語)
- <解除の場合> 状況把握と状況報告の分離(英語)・一体化(日本語)
状況報告と対人関係の一体化(英語)・分離(日本語)

(2) これまでの研究からある程度分かってきていることもあるが、この方向の研究が新たな興味深い成果を生産的にもたらすことも示唆する。

4. 研究成果

(1) 継承の場合 は、公的自己中心の英語では一人称の *I* と二人称の *you* で直示的中心をなし、私的自己中心の日本語では私的自己の「自分」が直示的中心で他者と対立する。この観点から、*come/go* 対「いく・くる」の違い、二人称 (*you*) 総称文の有無、「やる・くれる」授与構文の有無、時制一致現象の有無、時間や自己のメタファー構文の違い、心理述語の人称制限の有無など日英語の様々な構文的意義が原理的に説明される。

(2) 継承の場合 は、日本語では対人关系的要素が文法の中に組み込まれているのに対し、英語では付加的に対人関係を表現する仕組みになっている。「外は雨 {だよ / だね / です}」など

の使い分けは日本語では義務的だが、英語では呼称・イントネーション・付加疑問など多様な手段が随意的・選択的に使用される。

(3) いわゆるオノマトペなどのイデオフォン(ideophone)が日本語はかなり豊富なのに対し、英語ではそうでないというのは事実としてよく知られていることだが、日英語でどうしてこのような違いがあるかに関してはこれまで原理的に説明されてこなかった。この点については、分担者の金谷が明らかにしたように、イデオフォンは本来的に伝達を意図しない私的表現としての特徴をもつために、私的自己中心の日本語とは非常に相性がいいのに対し、公的自己中心の英語では伝達性が重視されるために、なかなか受け入れられにくいのである。したがって、イデオフォンは、まさに、継承の場合 に相当する現象だと言える。

(4) 継承の場合 と の相乗効果で重要となるのが、分担者の和田が指摘したように、英語では法助動詞を疑問文や平叙文で使って様々な発話行為を間接的に表現できるのに対し、日本語ではそれが難しいという違いである。例えば、Can you ...? は能力の質問とも依頼とも解釈され、また、Would you like to ...? は願望の質問、勧誘、依頼とも解釈される。日本語では「できますか」「したいですか」は能力・願望の質問としか解釈できず、依頼は「してくれますか」、勧誘は「しませんか」というように一定の発話行為に対応して一定の表現が決まっている。

このような間接発話行為に関する日英語の違いについて、和田は、三層モデルを自らが推進してきた時制理論・モダリティ理論と一体化した「包括的時制解釈モデル」の観点から次のように説明する。状況把握層と状況報告層が一体化している英語の文発話の基本単位は、対人的態度・対事心的態度・命題内容で構成される「状況報告」モードを表すのに対して、状況把握層が独立した単位として想定できる日本語の文発話の基本単位は、対事心的態度と命題内容で構成される「状況把握」モードを表す。英語は、デフォルトの言語機能モードが状況報告であるため、文発話はそのま聞き手に向けたものとして解釈され、かつ、聞き手志向の情報はずしも言語化されないため、話者の伝達意図は発話場面から推測されるタイプの言語である。それゆえ、間接発話行為が生じやすい。一方、日本語はデフォルトの言語機能モードが状況把握であるため、文を発話しただけでは思考表出に過ぎず、聞き手に向けた発話と解釈される際、通例、対人的態度と一体化した形で話者の伝達意図の言語化が求められる。それゆえ、間接発話行為が生じにくい。

このような現象の解明はこれまでになかった新たな知見を文法論・モダリティ論・発話行為論にもたらすものであり、日英語対照研究にも大きく貢献することが見込まれる。

さらに、包括的時制解釈モデルは、英語における未来表現の文法や、日英語の小説における時制選択とその解釈、ならびに日英語話法における時制現象に対しても原理的な説明を与えることができる理論的枠組みであることが示されている。

(5) 解除の場合 については、英語では公的自己による状況報告の制約を受けないで、私的自己による状況把握が際立つ。この観点から説明可能なのは、上述の Mad Magazine 構文や場所句倒置構文だけでなく、日記・メモ・新聞の見出し・ツイッターなどで多用される特殊な省略構文がある。そのなかでも、少し複雑な構文として、分担者の金谷が考察した because X 構文があり、I cannot go out today because tired. のような例である。金谷が明らかにしたように、because に後続する X 要素は私的表現の具現であり、したがって、because X の部分はいわば独話的な機能をもつ。ところが、それが埋め込まれている文全体は、伝達が意図された公的表現として特徴づけられる。そうすると、独話は私的自己による思考表出と考えられるので、文全体としては、話し手が自らの思考を部分的にさらけ出すことにより、聞き手に親近感や心的距離の近さなどをアピールするという効果をもつことになる。これは、公的自己中心の英語でデフォルト志向性を解除することの効果の一面を示すものである。

(6) さらに、英語における解除の場合 に対応するのが、非定形節に見られる主体化現象である。日英語に関する認知言語学的研究では、日本語は英語に比べて主体化の度合いが強い、つまり、主体が状況に自己を投入する度合いの強い言語であるということが明らかにされてきたが、これは、日本語を英語の定形節と比べた際の特徴である。ところが、英語でも非定形節を観察すると、日本語と同じような主体化現象が見られる。例えば、心的作用を表す動詞の非定形節補部では I want to win. や I imagined playing the piano. などのように、補部が記述する状況に主体として直接関与するときは、主体は言語的に表示されない。そうすると、英語でも非定形節になると、定形節に比べて、主体化の度合いが強くなるのはどうしてか、ということが問題となる。

この問題に対しても、三層モデルにおけるデフォルト志向性の解除という観点から次のように説明される。つまり、英語の定形節は公的自己中心なので客観的把握を好むが、非定形節は主述間の人称・時制の制約から自由になることで、公的自己中心というデフォルト志向性が解除され、私的自己による状況把握が前景化されるので、主体化の度合いが強まるということである。このような原理的で体系的な説明はこれまでではなかったものである。

(7) 日本語における解除の場合 が関与する例として興味深いのは、英語の間接話法の証拠的

報告用法とそれに対応する日本語の構文の関係である。間接話法の証拠的報告用法とは、話し手が主語の思いを情報源にして、その内容を（確実なものではなくても）基本的に受け入れ、話し手自身の観点を優先して、聞き手に伝える用法である。例えば、英語では、Who was Louise with last night? という質問に対して、間接話法を用いて Henry thinks that she was with Bill. のように答えることができる（例は Simons (2007)による）。ところが、日本語では「ルイズは、きのうの夜、誰といたの?」という質問に対して、間接話法を用いて「??ヘンリーはビルといたと思ってるよ」のように答えるのは不自然であり、このような場合は、伝聞構文を用いて、「ヘンリーの考えでは、ビルといた{そうだ/らしい}よ」のように答えるのが自然な応答である。そうすると、英語では間接話法は証拠的報告として自然に用いられるが、日本語ではそうではなく、証拠的報告には「そうだ」「らしい」などの伝聞構文が通常用いられるのはどうか、ということが問題となる。

この問題に対しても、三層モデルにおけるデフォルト志向性の解除という観点から次のように説明される。つまり、公的自己中心の英語では、間接話法で私的自己の思いを記述するには人称・時制表示の点で公的自己の視点が不可欠であるため、その私的自己の思いを公的自己が自らの目的のために利用することができ、したがって、証拠的報告も可能となる。それに対し、私的自己中心の日本語では、間接話法は、私的自己の思いの報告が優先されるため、私的自己を情報源として、その思いを公的自己が私的自己から独立した目的のために利用することはできず、したがって、証拠的報告には適さない。日本語で証拠的報告に伝聞構文が用いられるのは、伝聞構文では、（英語の間接話法と同様に）公的自己の存在が不可欠であり、引用される私的表現においては、公的自己の視点が優先されるからである。

要するに、伝聞構文では、日本語の間接話法のもつ私的自己中心のデフォルト志向性が解除され、公的自己中心の解釈に組み替えられるということである。以上のような事実観察はもちろんのこと、その原理的で体系的な説明もこれまではなかったものである。

(8) 日本語における解除の場合でさらに興味深いのは、¹にあるように状況把握と状況報告が一体化し、かつ、²にあるように状況報告が対人関係と分離するパターンである。これは英語のデフォルトパターンと平行的だが、日本語ではそれは書き言葉、特に三人称小説の語りやデアル体の論説文などに見られると考えられる。よく指摘されるように、語りでは「彼は悲しかった」と他者の心理報告が直接形で可能だが、その一方で、「*彼は悲しかった{よ/ね}」など対人関係の終助詞はつかない。これは三人称小説では全知の語り手が不特定の読者に語るため、状況報告はあっても、特定の対人関係は存在しないからである。状況把握と状況報告が一体化すると、より客観的な捉え方が許され、例えば「そのニュースは彼をすごく喜ばせた(*よ)」のような通常の会話では容認されない無生物主語構文も認可される。この点については、三層モデルを研究している大学院生が代表者の指導のもとに実例を集めて検証し、その成果を日本認知言語学会で発表している（石川 (2021)）。このように話し言葉も書き言葉も三層の関係から捉えると、その違いをデフォルト志向性とその解除という観点から原理的に説明できる可能性が開け、日本語の文体論や翻訳論にもこれまでにない貢献が期待できる。

(9) 最後に、英語の解除の場合³に相当する構文には、I tell you, I assure you などの遂行節や I think, I hear などのいわゆるヘッジ表現があり、これらについては、三層モデルの枠組みですでに Ikarashi (2015)で考察されており、状況報告に一定の対人調節的機能を付与する構文と分析されているが、さらなる詳細は今後データをより広範に見て、詰めていく必要があり、これは今後の課題である。

<引用文献>

- Ikarashi, K. (2015) *A Functional Approach to English Constructions Related to Evidentiality*, Doctoral dissertation, University of Tsukuba.
- 石川和佳 (2021)「語りの文脈における日本語無生物主語構文の英語的ふるまい 言語使用の三層モデルの観点から」日本認知言語学会第22回大会『予稿集』, 129-132, 2021.
- Konno, H. (2015) "The Grammatical Significance of Private Expression and Its Implications for the Three-Tier Model of Language Use," *English Linguistics* 32, 139-155.
- Shizawa, T. (2015) "The Rhetorical Effect of Locative Inversion Constructions from the Perspective of the Three-Tier Model of Language Use," *English Linguistics* 32, 156-176.
- Simons, M. (2007) "Observations on Embedding Verbs, Evidentiality, and Presupposition," *Lingua* 117, 1034-1056.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計17件（うち査読付論文 17件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Yukio Hirose	4. 巻 40
2. 論文標題 Predication-Based vs. Domain-Based Comparison: A Contrastive Study of Comparative Constructions in English and Japanese	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Tsukuba English Studies	6. 最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Naoaki Wada	4. 巻 40
2. 論文標題 Be Going To and Aller: A Temporal Structure Approach	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Tsukuba English Studies	6. 最初と最後の頁 171-203
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Masaru Kanetani	4. 巻 40
2. 論文標題 On the Relation between Richness of Ideophones and Private-Self-Centeredness: A Comparison of Japanese and English	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Tsukuba English Studies	6. 最初と最後の頁 267-287
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Masaru Kanetani	4. 巻 -
2. 論文標題 A Grammatico-Pragmatic Analysis of the Because X Construction: Private Expression within Public Expression	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 F1000 Research	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.12688/f1000research.72971.2	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Naoaki Wada	4. 巻 -
2. 論文標題 Tense Choice and Interpretation in First-Person Stories: A Contrastive Study of English and Japanese	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Aspects of Tenses, Modality, and Evidentiality	6. 最初と最後の頁 32-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1163/9789004468184_004	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 和田尚明・志村春香	4. 巻 -
2. 論文標題 Be Going Toの「依頼」用法について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 時制・アスペクト・モダリティ・視点と状況把握・状況報告	6. 最初と最後の頁 123-153
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Masaru Kanetani	4. 巻 34
2. 論文標題 Mental Representations of Multimodal Constructions: The Case of Japanese Psychomimes	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Belgian Journal of Linguistics	6. 最初と最後の頁 174-185
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1075/bjl.00044.kan	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣瀬幸生	4. 巻 20
2. 論文標題 日英語のデフォルト志向性とその解除－英語の非定形節に見られる主体化現象を中心に－	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本認知言語学会論文集	6. 最初と最後の頁 103-115
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yukio Hirose	4. 巻 45
2. 論文標題 Where the Awareness Condition Comes from: Cross-Linguistic Generalizations about Viewpoint Reflexives in English and Japanese	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Energeia	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 和田尚明	4. 巻 -
2. 論文標題 日本語と英語の時制・アスペクト・モダリティならびにその関連現象 包括的時制解釈モデルによる分析	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 TAMEに関する多言語研究と認知モード	6. 最初と最後の頁 1-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 和田尚明	4. 巻 -
2. 論文標題 日英語の三人称小説における時制形式選択とその関連現象 - 言語使用の三層モデルとC-牽引に基づく分析 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 [研究プロジェクト] 時間と言語 文法研究の新たな可能性を求めて	6. 最初と最後の頁 231-260
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 和田尚明	4. 巻 -
2. 論文標題 英語の「した」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本語のテンス・アスペクト研究を問い直す2: 「した」「している」の世界	6. 最初と最後の頁 137-157
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Masaru Kanetani	4. 巻 37
2. 論文標題 Review of Johnson, Mark (2017) Embodied Mind, Meaning, and Reason: How Our Bodies Give Rise to Understanding	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 English Linguistics	6. 最初と最後の頁 80-89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣瀬幸生	4. 巻 76
2. 論文標題 主観の客体化 他者の思いをどのように受け止め、伝えるか	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 文藝言語研究・言語篇	6. 最初と最後の頁 73-98
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yukio Hirose	4. 巻 -
2. 論文標題 Logophoricity, Viewpoint, and Reflexivity	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 The Cambridge Handbook of Japanese Linguistics	6. 最初と最後の頁 379-403
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Naoaki Wada	4. 巻 -
2. 論文標題 C-gravitation and the Grammaticalization Degree of "Present Progressives" in English, French, and Dutch	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 New Trends in Grammaticalization and Language Change	6. 最初と最後の頁 207-230
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 和田尚明	4. 巻 18
2. 論文標題 新しい学説はどのように外国語教育に貢献するのかーモダリティ・心的態度・間接発話行為の日英の違いを言語使用の三層モデルから説明するー	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本語文法	6. 最初と最後の頁 28-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計22件 (うち招待講演 6件 / うち国際学会 12件)

1. 発表者名 廣瀬幸生
2. 発表標題 他者の思いをことばでいかに利用するか 日英語における主観の客体化研究
3. 学会等名 日本英語学会第39回大会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 廣瀬幸生
2. 発表標題 英語補部節意味論から三層モデルへ：自分の言語学を求めて
3. 学会等名 筑波英語学会第42回大会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 廣瀬幸生
2. 発表標題 言語研究の今後への期待 意味・語用論的対照研究を中心に
3. 学会等名 Data Science in Collaboration on Language (DaSiC) 2021 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Naoaki Wada and Haruka Shimura
2. 発表標題 On the 'Request' Use of Be Going to
3. 学会等名 The 17th International Pragmatics Conference (IPrA 17) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Masaru Kanetani
2. 発表標題 How Are Multimodal Constructions Multimodal? The Case of Japanese Psychomimes
3. 学会等名 The 11th International Conference on Construction Grammar (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 和田尚明
2. 発表標題 英独語の単純現在形の「未来時指示」について
3. 学会等名 第8回TAME研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 金谷優
2. 発表標題 イデオフォンの日英類型論と構文分析
3. 学会等名 第8回筑波英語学若手研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 廣瀬幸生
2. 発表標題 日英対照から考えることばの働き 言語使用の三層モデルについて
3. 学会等名 外国語教育メディア学会関東支部第142回研究大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 廣瀬幸生
2. 発表標題 日英語のデフォルト志向性とその解除 英語の非定形節に見られる主体化現象を中心に
3. 学会等名 日本認知言語学会第20回全国大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yukio Hirose
2. 発表標題 Where the Awareness Condition Comes from: Cross-Linguistic Generalizations about Viewpoint Reflexives in English and Japanese
3. 学会等名 The 15th International Cognitive Linguistics Conference（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 廣瀬幸生
2. 発表標題 主観の客体化 他者の思いをどのように受け止め、伝えるか
3. 学会等名 ドイツ文法理論研究会第101回研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Naoaki Wada
2. 発表標題 On the So-Called Volitional Use of Will: Semantic or Pragmatic or Both?
3. 学会等名 The 15th International Cognitive Linguistics Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Haruka Shimura, Naoaki Wada, and Hiroko Wakamatsu
2. 発表標題 The Indefinite Use of the Present Perfect Progressive and Its Emotional Effects
3. 学会等名 The 15th International Cognitive Linguistics Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Masaru Kanetani
2. 発表標題 So Many Ideophones in Japanese but Less So in English: A Three-Tier Model Account
3. 学会等名 The 15th International Cognitive Linguistics Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Masaru Kanetani
2. 発表標題 Toward a Multimodal CxG Analysis of Japanese Mimetic Expressions
3. 学会等名 The 52nd Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaea (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 金谷優
2. 発表標題 言語知識としての構文ネットワーク：Because構文を例に
3. 学会等名 日本英語学会第37回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yukio Hirose
2. 発表標題 Introduction: English and Japanese as Seen from the Three-Tier Model of Language Use
3. 学会等名 The Fifth International Conference of the International Society for the Linguistics of English (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yukio Hirose
2. 発表標題 English as a Public-Self-Centered Language and Japanese as a Private-Self-Centered Language
3. 学会等名 The Fifth International Conference of the International Society for the Linguistics of English (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Naoaki Wada
2. 発表標題 Temporal Phenomena in First-Person Stories: A Contrastive Study of English and Japanese from a Perspective of the Three-Tier Model of Language Use
3. 学会等名 Chronos 13 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Naoaki Wada
2. 発表標題 How to Express (Indirect) Speech Acts in English and Japanese: A Perspective from the Three-Tier Model of Language Use
3. 学会等名 The Fifth International Conference of the International Society for the Linguistics of English (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Masaru Kanetani
2. 発表標題 Innovation Because Deviation: Cases of Because Constructions
3. 学会等名 The Fifth International Conference of the International Society for the Linguistics of English (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 金谷優
2. 発表標題 ideophoneの研究：進代言語学への応用へ向けて
3. 学会等名 第6回筑波英語学若手研究会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Naoaki Wada	4. 発行年 2019年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 444
3. 書名 The Grammar of Future Expressions in English	

1. 著者名 Masaru Kanetani	4. 発行年 2019年
2. 出版社 John Benjamins Publishing Company	5. 総ページ数 208
3. 書名 Causation and Reasoning Constructions	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	和田 尚明 (WADA Naoaki) (40282264)	筑波大学・人文社会系・教授 (12102)	
研究分担者	金谷 優 (KANETANI Masaru) (50547908)	筑波大学・人文社会系・助教 (12102)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------